

韓愈の「新律詩」

——元稹による韓愈の近体詩評価をめぐって——

畑村 学

一、はじめに

韓愈と同じ中唐の人である元稹は、赴任先の通州(四川省達県)で聞いた韓愈の詩を「新律詩」と評した。「見人詠韓舍人新律詩因有戲贈(人の韓舎人の新律詩を詠ずるを見る。因りて戯れに贈る有り)」と題する詩にその言葉は見えるのが、本稿ではこの元稹の詩を通じて、元稹の言う韓愈の「新律詩」が如何なるものであったかを考察する。

筆者はこれまで、貞元年間から元和年間初期にかけての韓愈の詩の変化に注目して数篇の論文を発表したが、元稹のこの詩をここで敢えて取り上げるのは、元稹の詩が元和十年当時の韓愈の詩作に言及しており、「新律詩」の内容を理解すること、元和年間後期における韓愈の詩作の一端を知り手がかりになると考えるからである。

論文の構成としては、最初に元稹の詩の語句等を解説して大意を示し、その後で元詩の言及する韓愈の「新律詩」の特徴を韓愈の実作に照らして考察をする。なお本文は、基本的に冀勤点校本『元稹集』(中華書局、一九八二年)に拠っており、字句の異同についても冀勤の校勘を参考にする。

二、元稹「見人詠韓舍人新律詩因有戲贈」詩

- | | |
|------------|---------------|
| 1 喜聞韓古調 | 喜び聞く 韓の古調 |
| 2 兼愛近詩篇 | 兼ねて愛す 近ごろの詩篇 |
| 3 玉聲声声徹 | 玉聲 声声 徹り |
| 4 金鈴箇箇圓 | 金鈴 箇箇 圓かなり |
| 5 高疏明月下① | 高疏 明月の下 |
| 6 細膩早春前 | 細膩 早春の前 |
| 7 花態繁於綺 | 花態 綺よりも繁く |
| 8 闔情軟似錦 | 闔情 軟かにして錦に似たり |
| 9 輕新便妓唱 | 輕新にして 妓唱に便に |
| 10 凝妙入僧禪 | 凝妙にして 僧禪に入る |
| 11 欲得人人伏 | 人人の伏すことを得んと欲し |
| 12 能教面面全 | 能く面面をして全からしむ |
| 13 延清苦拘檢② | 延清 拘檢に苦しみ |
| 14 摩詰好因縁 | 摩詰 因縁を好む |
| 15 七字排居敬 | 七字 居敬を排し |
| 16 千詞敵楽天※1 | 千詞 楽天に敵す |
| 17 殷勤閑太祝※2 | 殷勤たり 閑たる太祝 |

18 好去老通川※3
 19 莫漫裁章句
 20 須饒紫禁仙

好し去れ 老いたる通川
 漫りに章句を裁つ莫かれ
 須く紫禁の仙を饒かにすべし

〈元槨自注〉

※1 侍御八兄、能為七言絶句。賛善白君、好作百韻律詩。
 ※2 張君籍。
 ※3 自謂。

〈校勘〉

① 「高疏」、張元濟校宋刻本注「一作鏗鏘」。
 ② 「清」、「元槨集」作「之」、抛銭謙益校宋刻本・「文苑英華」卷二
 五八改。

〈製作年代及び題注〉

花房英樹『元槨研究』（彙文堂書店、一九七七年）所収「年譜」及び
 下孝萱『元槨年譜』（齊魯書社、一九八〇年）によれば、この詩は元和
 十年（八一五）元槨が通州の司馬に赴任した際の作であるとされる。そ
 の際に元槨は、当時「舍人」であった韓愈の「新律詩」を当地の人々
 が詠ずるのを聞き、そこで戯れにこの詩を作って送ったという。元和
 十年当時、韓愈の「新律詩」が、長安から遠く離れた蜀の地で人々に
 詠ぜられるほど流行していたことを言う。

「詠」の語は、白居易「與元九書」（朱金城箋校『白居易集箋校』
 卷四五。以下白居易の引用は全て同書に拠る。）に、

自長安抵江西、三四千里、凡郷校、仏寺、逆旅、行舟之中、往往有
 題僕詩者。士庶、僧徒、孀婦、処女之口、每每有詠僕詩者。此誠雕
 虫之戲、不足為多。然今時俗所重、正在此耳。

長安より江西に抵ること、三四千里、凡そ郷校、仏寺、逆旅、行舟

の中、往往僕が詩を題する者有り。士庶、僧徒、孀婦、処女の口、
 每每僕が詩を詠ずる者有り。此れ誠に雕虫の戯、多しと為すに足ら
 ず。然れども今の時俗の重する所、正に此に在るのみ。

とあるように「口」に出してうたうことである。後の9「妓唱」10「僧
 禪」とあることから、韓愈の詩も白居易の詩と同じように庶民レベル
 の人々に愛唱されていたのである。

また「新律詩」の「律詩」は、狭義の律詩と絶句及び排律を含んだ
 広義の律詩、すなわち近体詩の意味で、このことは後に述べられるよ
 うに、韓愈の律詩を元宗簡の七絶、白居易の排律と比べていることか
 らわかる。

〈本文語釈及び通釈〉

1 喜聞韓古調、2 兼愛近詩篇

「喜んで聞く 韓愈の古い調べを、兼ねて愛する 近作の詩篇を」

1・2句は、韓愈の古体・近体の両詩を評価したものであるが、元
 槨の言い方からは、元槨のみならず当時の韓愈の詩に対する一般的な
 評価は、もっぱら古体詩に向けられていたことがわかる。詩作数の上
 でも、この元槨の詩のうたわれた元和十年までは、古体詩の制作数が
 近体詩を上回っていることから、韓愈の詩才はほとんど古体詩におい
 て発揮されていたと言つてよいであろう。しかしながら元槨の「近こ
 ろの詩篇」という言い方からは、この元和十年頃には、韓愈は近体詩
 を多く制作し始めていたことがわかる。下定雅弘氏の指摘に拠れば、
 韓愈の詩は元和八年を境に古体優勢から近体優勢へと変化しており、
 元槨のこの詩は、そうした韓詩の詩形の変化の過渡期を指摘した最も
 早いものと言えるであろう。

3 玉聲声声徹、4 金鈴箇箇円

「その詩は玉磬がそれぞれの清く澄んだ音を響かせ、金鈴のひとつひとつが丸い形をしているようだ」

韓愈の「新律詩」を、3句では古代の玉製の打楽器「玉磬」の、4句では「金鈴」の音色に喩える。

「玉磬」は、幾つかの音色の異なるへの字型の玉を台につり下げて打ち鳴らす楽器。『毛詩』商頌「那」詩の毛伝に、「磬は声の清なる者なり」とある。「声声」は、さまざまな音。白居易「琵琶引」(卷二二)に、「絃絃掩抑声声思、似訴平生不得志」(絃絃に掩抑して 声声に思ひ、平生 志を得ざるを訴うるに似たり)とある。

「箇箇円」は、金鈴のひとつひとつが円い形をしていること。「箇箇」は、杜甫「屏跡三首」其二(『杜詩詳注』卷一〇)に、「村鼓時時急、漁舟個個輕」(村鼓 時時急に、漁舟 個個輕し)と見える。

韓愈の「新律詩」が「玉磬」や「金鈴」の音色に喩えられるのは、それが音声上、清澄で美しい特徴を有していたからであろう。

以上述べた「新律詩」の音声面での特徴は、7・8句から判断される内容の通俗性、詩の形式が歌唱に適合していることと並んで、韓愈の「新律詩」が大衆に歌われた主要な原因であろう。

5 高疏明月下、6 細膩早春前

「高く広々とした 明月の下の表現、繊細で美しい 早春の前の描写」

この二句は「新律詩」の内容に言及しており、秋天の明月、早春の景の描写ともに優れる韓愈の詩を称えている。

「高疏」は、「新律詩」の繊細で美しい表現をいう6句「細膩」と対になっていることから、「明月下」の表現を評した語であると考えられるが用例は未見。ちなみに『漢語大詞典』では「高曠貌」の意として元稹のこの詩を引く。「疏」は、『玉篇』女部に「闊なり」とある。類似した評語に「高遼」があり、『文鏡秘府論』南篇に、

正始中、何晏・嵇阮之儔也。嵇興高遼、阮旨閑曠、亦難為等夷。

正始中には、何晏・嵇・阮の儔なり。嵇の興は高遼にして、阮の旨は閑曠、亦た等夷を為し難し。

と見える。なお「高疏」は「鏗鏘」に作るテキストがあり、そちらであれば響きわたる楽器の音声を形容する。『詩品』上品の、張協の詩の評に、

詞彩葱菁、音韻鏗鏘。

詞彩は葱菁にして、音韻は鏗鏘。

とあるのは、張協の詩の音声がくつきりと明確なさまをいう。

「細膩」は、杜甫「麗人行」(『詳注』卷二)では、女性の肌のきめ細やかでしっとりとした様をいう。「態濃意遠淑且真、肌理細膩骨肉勻」(態濃に意遠く淑にして且つ真なり、肌理細膩にして骨肉勻し)。

元稹自身の用例としては、「内状詩寄楊白二員外」(卷二二)に、

形管内人書細膩、
金奩御印篆分明

形管の内人 書は細膩
金奩の御印 篆は分明

とあり、宮女の書の繊細で美しい様子をいう。また「寄旧詩與薛濤因成長句」(外集卷七)にも、

詩篇調態人皆有、
細膩風光我独知

詩篇の調態 人 皆有り
細膩の風光 我 独り知る

とあり、女性詩人・薛濤の文彩(「風光」)を「細膩」と評している。元稹の例がいずれも女性の書いた書或いは詩であることから考えて、韓愈の「新律詩」が描き出す「早春の前」の描写も、同じく繊細で美しいものであったのだろう。

7 花態繁於綺、8 閨情軟似錦

「花の様態はあや絹よりも細密に美しく、閨房の女性の情は錦のよう
にしなやかだ」

この二句も、前聯と同じく「新律詩」の内容について言う。「新律
詩」のなかには、花の形態や色彩を仔細に描写したものや、閨房の女
性の思いを情緒豊かに表現した詩が含まれていたという。

9 軽新便妓唱、10 凝妙入僧禪

「軽快清新であるため妓女が歌うのにちょうどよく、莊重玄妙にして
僧侶の禪に取り入れられる」

以上述べてきた「新律詩」が、通州の妓女や僧侶にうたわれること
をいう。

「軽新」は用例の未見な語であるが、類似した評語に「軽清」（軽
快・清新の意）がある。『文心雕龍』哀弔篇に、「裊衡之用平氏、縹麗
而輕清」（裊衡の平氏を用いしは、縹麗にして輕清）と見える。「新」
は「清新」「新奇」の意味であろう。

10句の「凝妙」も用例が見当たらない。ここでは「軽新」と対にな
っていることから「凝」は動詞の「凝らす」ではなく、韓愈の「新律
詩」の特徴をあらわす評語として用いられていると考えられる。人物
評語には「凝重」（『晋書』載記「呂光」）、「凝峻」（同書傳玄伝）「凝
遠」（『陳書』蕭允伝）「凝深」（同書周弘正伝）などが見られる。

11 欲得人人伏、12 能教面面全

「みんなに「すごいやつだ」と言わせようと、すべての面を完璧に仕
上げている」

冒頭の1・2句と関連させて考えれば、韓愈が古体詩のみならず、
近体詩においても人々を感じさせるような優れた詩をつくったことを
言うのであろう。「伏」は敬服の意。韓愈「考功員外盧君墓銘」（馬其

和校注『韓昌黎文集校注』卷六）に、「愈之宗兄故居舍人君、以道德
文学伏一世」（愈の宗兄、故の起居舍人君、道德文学を以て一世を伏
す）とある「伏」と同じ意。

13 延清苦拘檢、14 摩詰好因縁

「宋延清は律詩のきまりに苦しみ、王摩詰はほとけの話が大好きだ」

律詩を得意とした過去の偉大な詩人と比較して、韓愈が律詩を自在
に作り、内容的にも新鮮さを備えていることを称える。

13句は『元稹集』の本文は「延之」に作るが、14句「摩詰」が盛唐
・王維の字であることから、錢謙益校宋刻本及び『文苑英華』卷二五
八の「延清」に作るのが正しい。延清は、初唐・宋之間の字。宋之間
はよく知られるように律体の完成に頗る貢献した詩人である。元稹も
「唐故工部員外郎杜君墓係銘并序」（卷五六）のなかで、

唐興、官学大振、歴世之文、能者互出、而又沈宋之流、研練精切、
穩順声勢、謂之為律詩。由是而後、文變之体極焉。

唐の興るや、官学 大いに振い、歴世の文、能くする者 互いに出
ず。而も又沈・宋の流、研練精切にして、穩順声勢、之を謂いて律
詩と為す。是れ由りして後、文變の体 極まれり。

と称賛している。宋之間は近体詩のなかでも五言の律詩・排律にすぐ
れたとされる。

「拘檢（拘束される意）に苦しむ」とあるのは、宋之間が近体詩の二
四不同や二六対などの規則に束縛されて自由に詩作ができなかったこ
とをいうのである。韋応物「南園陪王卿游驪」（『全唐詩』卷一九
二）に、「形跡雖拘檢、世事澹無心」（形跡 拘檢ありと雖も、世事
澹として無心なり）、また韓愈「陪杜侍御游湘西兩寺獨宿有題一首因
獻楊常侍」（錢仲聯『韓昌黎詩繫年集釈』卷三。以下韓愈の詩の引用
及び卷数はこれに拠り、制作年代も基本的に同書に従う。）「群行忘
後先、朋息棄拘檢」（群行して 後先を忘れ、朋に息いて 拘檢を棄

つ)などの用例がある。

「摩詰」は王摩詰、すなわち盛唐の王維のこと。王維が近体詩に優れたことはよく知られるが、例えば明の胡應麟は『詩薈』の各所で絶讃している。絶句については、「盛唐摩詰・中唐文房、五六七言絶俱工、可言才矣」と五・六・七言すべてに優れるとし、また五律も「惟沈・宋・李・王諸子、格調莊嚴、氣象閑麗、最為可法」、排律も「沈・宋二氏、藻贍精工。太白・右丞、明秀高爽」「說盛唐時排律、延清・摩詰等作、真如入万花春谷、光景爛熳、令人応接不暇、賞玩忘帰」と、宋之間らとともに極めて高く評価している。

「因縁」は仏教語であり、「因縁を好む」とは、熱心な仏教信者であった王維の詩にその影響が色濃く現れていることを看取してこのように表現しているのであろう。先の胡應麟は、同書で王維の「辛夷塢」(「輞川二十首」)を評して「五言絶之入禅者」といい、また「太白五言絶自是天仙口語、右丞卻入禅宗」とも述べ、王維の詩に仏教の影響があることを指摘している。

宋之間が律詩の規則に苦しみ、王維の詩に内容的な偏りを感じてしまいうほど、韓愈の「新律詩」が詩の規則に縛られず、内容的にも新鮮であることを称えている。

15七字排居敬、16千詞敵楽天

「七つの文字では元居敬を排しのけ、千のことばでは白楽天に匹敵するほど」

自注により15句は元宗簡、16句は白居易のことを述べている。この二句は韓愈の律詩を、律詩を得意とする二人の友人のそれと比較している。

「居敬」は元宗簡の字。元宗簡は元稹や白居易と交遊のあった人物で、その文集につけた白居易の序「故京兆元少尹文集序」(巻六八)に、

居敬姓元、名宗簡、河南人。自舉進士、歴御史府、尚書郎、訖京兆
丞尹、二十年。著格詩一百八十五、律詩五百九、賦述銘記書碣讚序

七十五、総七百六十九章、合三十卷。長慶三年冬、疾弥留、將啓手足、無他語。語其子途云、吾平生酷嗜詩。白楽天知我者。吾歿、其遺文得楽天為之序、無恨矣。

居敬 姓は元、名は宗簡、河南の人なり。進士に挙げられしより、御史府、尚書郎を歴、京兆の丞尹に訖ること、二十年なり。格詩一百八十五、律詩五百九、賦述銘記書碣讚序七十五を著し、総て七百六十九章、合せて三十卷なり。長慶三年冬、疾、弥いよ留まり、將に手足を啓かんとし(臨終を迎える意)、他語無し。其の子途に語りて云う、吾 平生 酷だ詩を嗜む。白楽天 我を知る者なり。吾歿し、其の遺文 楽天の之が序を為すを得ば、恨み無けん、と。

著作は凡て七六九篇三〇巻あり、なかでも律詩(近体詩)は五〇九篇と最も多く、しかも元宗簡の得意とするところであったようだ。元稹の自注に「侍御八兄、能為七言絶句」と元宗簡が七絶を得意としたことが記され、また白居易「與元九書」(巻四五)にも、張籍の「古楽府」、李紳の「新歌行」、盧拱・楊巨源の律詩と並んで「元白往還詩集」に収められた詩として「寶七、元八絶句」と挙げられる。なお元宗簡と白居易の交遊については、朱金城『白居易研究』(陝西人民出版社、一九八七年)所収「白居易交遊」、及び小松英生「白居易と元宗簡」(『藤原尚教授広島大学定年祝賀記念中国学論集』溪水社、一九九七年)に詳しい。

白居易が得意とした「千詞」は、自注「贊善白君、好作百韻律詩」から、五言二百句の排律であった。白居易のこれに該当する詩には以下のものが挙げられる。

- ① 代書詩一百韻寄微之(元和五年)
- ② 東南行一百韻寄通州元九侍御澧州李十一舍人果州崔二十二使君開州韋大員外庾三十二補闕社十四拾遺李二十助教員外賈七校書(元和十二年)
- ③ 和夢遊春詩一百韻并序(元和五年)
- ④ 渭村退居寄礼部崔侍郎翰林錢舍人詩一百韻(元和九年)

このうち①から③が元槿との唱和詩である。ただし②は元和十年以降の作であるため、元槿の指摘する詩には含まれない。また白居易との唱和詩に限定しないのであれば、時期的には④も該当する。これ以外には、白居易の律詩で該当する詩はない。

白居易は、服喪が明けた元和十年、太子左贊善大夫に任ぜられており、その年の六月には宰相武元衡暗殺事件に上書したことが越権行為と見なされ江州司馬に左遷されている。よって元槿の自注に言うように白居易が「贊善」であった時期は、元和九年歳暮から元和十年半ばにかけてであり、よって元槿のこの詩はこの間に作られていることになる。

この二句で元槿は、韓愈の「新律詩」を友人のそれと比較している。詩題に「戯」とあるのはこのためであろう。恐らく元槿は、この詩を韓愈にだけでなく白居易や元宗簡、張籍にも送ったものと思われる。

17 殷勤閑太祝、18 好去老通川

「お世話になつている 太祝の閑職にある張籍さん、「お元気で」と言われ通川に赴任した年寄りの私」

自注により17句は張籍を、18句は元槿自身を指す。

「太祝」は太常寺太祝のことで、元和十年当時、張籍がついていた官職。張籍は元和元年(八〇六)にこの官について以降、十年間同じ官職にあった。白居易「與元九書」(卷四五)に、「張籍五十、未離一太祝」とある。この官職が「閑」職であったことは、白居易の「未だ一太祝を離れず」という言い方からすでに明らかである。「殷勤」すなわち情意がねんごろであるというのは、次句の「好去」が韓愈から元槿に向けての挨拶のことであることから、韓愈の、門弟である張籍に対する態度をいうと考えられる。韓愈が張籍を含め門弟を熱心に指導し、当時「韓門弟子」と呼ばれる集団を形成したことはよく知られている。なかでも張籍は、早い時期から韓愈に師事し、貞元十四年(七九八)韓愈が試験官をつとめた汴州の州試で合格したことが官界に入るきつかけとなった。またこの詩の作られた元和十年に近い事例では、

元和六年(八一)眼病を患ってほとんど盲目状態となった張籍のために自薦の書を代筆して浙東觀察使李遜に送ってやったことがある(代張籍與李浙東書「卷三」)。

「好去」は、別れるときの挨拶ことば。見送る側から見送られる側に向けて発せられる。『遊仙窟』に、主人公張郎が桂心・香兒らの侍女と別れる場面で、侍女が張郎を見送るときの言葉に、「皆送張郎曰、好去。若因行李、時復相過。」(皆 張郎を送りて曰く、好し去れ。若し行李に因らば、時に復た相過れ、と)。当時の俗語であるとして、張相『詩詞曲語辭匯釈』に説明がある。元槿と付き合ひのあった韓愈が、元槿が長安を去るにあたり送別の言葉を贈ったのである。「通川」は元槿の赴任県で、通州(四川省達県)の州都が置かれる。

これまでの内容は、すべて韓愈の「新律詩」と関わっており、友人である元宗簡や白居易もそれに関連して登場していた。しかしこの二句の張籍と元槿自身は、むしろ普段から韓愈と交際があるということと登場しており、これまでの内容、この後の結びの二句とも内容的に少しずれると感ぜられる。

19 莫漫裁章句、20 須饒紫禁仙

「かつてに章句を裁断してはならない、紫禁の仙人の蔵を満たすのだから」

歌唱される際、絶句のような短篇は一首全部がうたわれたであろうが、排律のような長篇になると、歌唱に適した二句或いは四句といった一部が引き出されてうたわれたのであろう。

「饒」は、ゆたかにする。今まで述べてきた優れた律詩を散逸させることなく増やすこと。「紫禁」は「紫微」に同じく禁中のこと、星の紫微垣を天子の居に比してこのように言った。南朝宋の謝莊「宋孝武宣忌貴妃誄」(『文選』卷五七)に、「掩綵瑤光、収華紫禁」(綵を瑤光に掩い、華を紫禁に収む)とあり、李善は「王者の宮は、以て紫微に象る。故に宮中を謂いて紫禁と為す」と説明する。唐の開元元年(七一三)に中書省を「紫微省」と一時改めたことから、中書舎人

のことを「紫微舍人」、中書令を「紫微令」などと称した。元稹も、地方の司馬である自分とは対照的に、知制誥の高位にある韓愈(韓舍人)を指して「紫禁仙」と呼んでいる。「仙」とあるのは皇宮や中央官署に関係するものに付けられる美称で、例えば尚書省の郎中・員外郎を指して「仙郎」と呼ぶのに同じ。「紫禁仙」の語は、中書舎人の要職にあった白居易の、「新昌新居書事四十韻因寄元郎中張博士」(巻一九)に見え、「迹慕青門隱、名慚紫禁仙」(迹は青門の隱を慕い、名は紫禁の仙を慚ぐ)と、自分が中書舎人という高位に在ることを恥ずかしいとうたっている。

三、「新律詩」の内容

以上、前章では元稹の詩を見てきた。本章では元稹の言う「新律詩」が、具体的に韓愈の如何なる詩を指したのか、元和十年当時の韓愈の実作に照らして考えてみたい。

まず元稹の詩に言及される詩の形式から考えてみる。元詩の15・16句からは、韓愈の「新律詩」に七言絶句と五言二〇〇句の長篇排律が含まれていたことがわかる。しかし現存する韓愈の詩には、後者の五言二〇〇句の排律は一篇も見られない。

韓愈の排律はすべて五言で、元和十年以前では「詠雪贈張籍」(貞元十九年、八〇句)「叉魚」(貞元二十一年、三六句)「喜雪獻裴尚書」(永貞二年、四〇句)「春雪」(元和元年、二〇句)「春雪間早梅」(元和元年、二〇句)「早春雪中聞鶯」(元和元年、一二句)、「学諸進士作精衛石填海」(元和五年、一二句)「和崔舍人詠月二十韻」(元和七年、四〇句)「送李尚書赴襄陽八韻」(元和十年、十六句)があるだけである。或いは二〇〇句と限定しなくとも、比較的長篇の排律のことを元稹は指しているのかも知れないが、元和十年頃、元稹の言うような長篇の排律は、現行の韓愈の集には存在していないのである。詩の結びで元稹が心配しているように、もともと二〇〇句であったものが、歌唱の際に裁断されたことそのまま散逸してしまったのであろうか。

一方の七絶は、この当時多作され始めている。元和七年には一篇も

作られなかつた七絶は、元和八年には古体・近体を併せた全作詩数三十二篇のうち三篇を占め、元和九年には六篇中二篇、元和十年は十四篇中八篇が七絶で占められる。この後も元和十一年には三十六篇中十二篇、元和十二年には十八篇中十三篇と、元和八年以降は七絶の制作がコンスタントに行われていることがわかる。

次に内容から考えてみる。元詩の7・8句から「新律詩」には花や女性の閨情を詠じた詩が含まれていたことがわかる。しかしながら、これも現存する韓愈の詩と食い違いがあり、8句に言うような女性の閨情を詠じた内容の詩は、韓愈の全詩に目を通して、貞元九年(七九三)作とされる「青青水中蒲三首」(巻一)を除いて見つからない。ただもう一方の花を詠じた内容の詩には、七絶のものが数篇存在している。「題百葉桃花」(芍薬)(ともに巻九、元和十年)が制作時期から「新律詩」に該当する可能性が高いが、これに「游城南十六首」(巻九、元和十一年)の詩を含めると、其二「題于賓客莊」其三「晚春」其四「落花」其五「楸樹二首其一」其六「楸樹二首其二」其七「風折花枝」を加えることができる。

以上のように、元稹の言う「新律詩」がどの詩を指すのかは、花を詠じた七絶がそれと考えられる以外ははっきりと特定するのが難しく、そのためそれらの律詩が何故「新」と評されたのかを論ずることは更に困難であるが、ここではひとまず過去の諸家の意見を参考に、韓愈の近体詩の「新」について考えてみたい。

韓愈の近体詩を早い時期に評価した一人が南宋の嚴羽である。嚴羽は『滄浪詩話』詩法篇のなかで、「律詩は古詩よりも難く、絶句は八句よりも難く、七言律詩は五言律詩よりも難く、五言絶句は七言絶句よりも難し」と述べているように、あらゆる詩形のなかで五絶を最も重視したが、同じ書の詩評篇で、その五絶について次のように述べている。

五言絶句、衆唐人是一様。少陵是一様。韓退之是一様。……
五言絶句、衆くの唐人は是れ一様なり。少陵は是れ一様なり。韓退之は是れ一様なり。……

唐代に作られた多くの五絶と異なり、杜甫と韓愈の五絶が独自性を備えるとして称えている。嚴羽の評価した詩が韓愈のどの詩を指しているのかは明らかでないが、清の朱彝尊(一六二九〜一七〇九)は、五絶の連作「奉和虢州劉給事使君三堂新題二十一詠」(卷八、元和八年に「新」を認めている)。

首首出新意、與王・裴「輞川」諸絶頗相似、音調卻不及彼之高雅。首首新意を出だし、王・裴の「輞川」の諸絶と頗る相似るも、音調は卻って彼の高雅に及ばず。(『韓昌黎詩繫年集釈』所引)

この二十一篇の連作詩が、かの王維と裴迪による「輞川二十首」を意識して作られたことはすでに諸家の説くところである。朱彝尊もその影響を認めており、「高雅」では「輞川詩」に及ばないという文意のなかではあるが、韓愈の詩に「輞川詩」にはない「新意」を見出している。

清の方世挙(一六七五〜一七五九)も、同じ連作詩を評するなかで、嚴羽と同じく歴代の五絶を幾つかのグループに分け、「昌黎は一派たり」と韓愈のオリジナリティを認め、「昌黎の派は遂いで東坡の宗とする所となり、而して陸放翁之を承く」(同『集釈』所引)と、韓愈から蘇軾へ、そして蘇軾から陸游へと継承されていく五絶の流れを指摘している。

そして五絶以外では、清の趙翼(一七二七〜一八一四)が韓愈の七律を高く評価した。

昌黎詩中律詩最少。五律尚有長篇及與同人唱和之作。七律則全集僅十二首。蓋才力雄厚、惟古詩足以恣其馳驟、一束於格式声病、即難展其所長。故不肯多作。然律中如詠月、詠雪諸詩、極物物之工、措詞之雅。七律更無一不完善穩妥、與古詩之危崛、判若兩手。

昌黎の詩中 律詩は最も少し。五律は尚お長篇及び同人と唱和するの作有り。七律は則ち全集僅かに十二首なり。蓋し才力雄厚にして、惟だ古詩のみ以て其の馳驟を恣にするに足り、一たび格式声病に束せらるれば、即ち其の長ずる所を展べ難きならん。故に肯えて多作

せず。然れども律中の月を詠じ、雪を詠ずる諸詩の如きは、体物の工、措詞の雅を極む。七律に更に一も完善穩妥ならざるは無く、古詩の奇崛と、判ちて両手の若し。(『甌北詩話』卷三)

韓愈には律詩(狹義)が少なく、なかでも七律は全詩中わずか一二篇しかない。それは彼の「雄厚」(豊富)な「才力」に基づく放逸な表現が、近体詩の中でもとりわけ形式や韻の規則の厳しい七律では發揮しにくかったからであろう。しかしながら、月や雪を詠じた律詩は秀作ぞろいであり、特に七律に関しては「完善穩妥」(完全で整っている)でないものは無く、「奇崛」(奇抜で力強い)の特徴を持つ古体詩とは、また異なつた趣がある、と趙翼はいう。

これまでの韓愈の詩の研究は、「奇險」や「以文為詩」と評される古体詩が中心であり、事実同時代或いは後世への影響から言えば、韓愈の功績は古体詩の制作において大きかったと言える。しかし本章で見えてきたように、韓愈の近体詩も元稹や後世の諸家にその「新」しさが指摘されており、数量的に少ないとはいえ、韓愈の文学を総合的に見ていく上で、近体詩の考察は不可欠であると言えるであろう。

四、終わりに

元稹の言う韓愈の「新律詩」が如何なる詩であったかは、花を詠じた七絶がそれに該当すると考えられる以外、詳しくはわからないが、元稹の言う通り、元和年間後期、具体的には元和八年以降に、韓愈の詩が古体優勢から近体優勢に変化することは、現行の韓愈の集から明らかである。

こうした韓愈の詩の形式の変化を、高級官僚となつたことによる韓愈の心境の変化との関係から論じたのが、下定氏の前掲論文(注④)である。そこでは元和七年までが求官・下級官僚時代、元和八年以降が高級官僚時代であるとして、各時期の官僚としてのアイデンティティの獲得の深さによる葛藤の性質の変化が、古体優勢から近体優勢の詩形の変化をもたらしたと結論づけられる。筆者もこの意見に基本的に賛成であるが、ただ、元和初期の韓愈の詩と後期の詩とを比べた時、

詩の形式だけでなく、語彙や自然描写にも大きな変化が見られ、これは高位に上ったことによる心境の変化が直接の原因ではなく、それに伴う韓愈の詩観や自然観の変化に起因していると考えられる。筆者にはこのことを論ずる若干の用意があるが、これについては韓愈の詩を具体的に取上げて次稿で詳しく論じたいと思う。

注

- ① 拙稿「貞元末流謫期における韓愈の文学活動」(『中国中世文学研究』二九、一九九六年)、「元和初年の韓愈—孟郊との聯句制作を中心に—」(『藤原尚教授広島大学定年祝賀記念中国学論集』溪水社、一九九七年)。
- ② 製作年代の考証については、十年譜に詳しいのでそちらを参照されたい。
- ③ 元和九年(八一四)十二月、韓愈は考功郎中のまま知制誥に任ぜられていた。唐代の習慣として、知制誥を「舍人」と称した。羅隱の「寄制誥李舍人」詩や、鄭谷の「獻制誥楊舍人」詩に「制誥」とわざわざ断っているのはその例であろう。韓愈はこの後元和十一年(八一六)正月に中書舍人に就任する。
- ④ 下定雅弘「韓愈の詩作—その古体の優勢から近体の優勢への変化について—」『日本中国学会報』四〇、一九八八年。
- ⑤ 15・16句から、韓愈の「新律詩」には七絶と五言の排律が含まれていたことがわかる。絶句が歌われやすい形式であったことは、唐・薛用弱『集異記』所収の王昌齡・高適・王之渙の逸話、すなわち三人が歌妓に歌われる詩を競い合った話で、歌われたのは高適のものを除いてはいずれも絶句であったことからよく知られる。排律に関しては、長篇まるごとが暗唱されたとは考え難く、19句に「漫りに章句を裁つ莫れ」とあるように、歌唱にふさわしい数句が切り取られて歌われたのである。
- ⑥ 元稹や白居易の評価とは対照的に、元宗簡の詩は『全唐詩』には一篇も採録されておらず現存していない。
- ⑦ 花房英樹『白氏文集の批判的研究』(彙文堂書店、一九六〇年) 第二部「総合作品評」では、この詩を五言古詩に分類するが、白居易自身はあくまで律詩に分類している。五三〇頁。
- ⑧ 張籍の事跡は、羅聯添「張籍年譜」(『唐代詩文六家年譜』所収、台湾、学海出版社、一九八六年)に拠る。
- ⑨ これ以外に楽府「有所思」を踏まえた「有所思聯句」(巻五、元和元年)が閨情を詠じた詩に数えられる。しかし「聯句」とあるように、韓愈個人の詩ではなく孟郊との共同製作であること、またこの聯句が元和元年の作であり2句にいう「近ごろの詩篇」に合わないこと、そして「閨情」の主題が孟郊の得意とするものであり孟郊には閨情を主題とした「古別離」「征婦怨四首」の他、ずばり「有所思」と題する楽府詩がある。また「有所思聯句」も、もともと孟郊の集に収められ、韓愈の集では遺文中に見えるものである。これについて錢仲聯は「有所思聯句」の題注で、「韓・孟聯句見韓正集者不入孟集、見孟集者韓正集亦未収。其載於韓正集者、体格純是韓、見孟集者、体格亦純是孟、所未解也」(『集釈』巻五所引)と述べる。恐らくはこの聯句が孟郊の呼びかけで始められたと思われることから、元稹の言う「新律詩」に含まれる可能性は極めて薄い。
- ⑩ 「游城南十六首」は、『韓昌黎集年集釈』では元和十一年(八一六)に繫年されるが、諸家の説くごとく十六篇すべてがこの時期に作られたものではない。筆者の考えを述べれば、公務が多忙となり、つかの間の休日や長安城南郊で過ごすという私生活が行われるようになるのは、比部郎中史館修撰となつて高級官僚の仲間入りをする元和八年(八一三)からであり、よつて「游城南十六首」には、元和十年以前の詩が含まれている可能性がある。
- ⑪ 管見では、韓愈の近体詩に関しては次の二篇の専論がある。芦立一郎「韓愈の近体詩」(『山形大学紀要』(人文科学)第一二巻第二号、一九九一年)、劉曾遂「略論韓愈の近体詩」(『唐詩論稿』所収。杭州大学出版社、一九九二年。ただし論文自体はこれ以前に学術雑誌に発表されたものと後記に記される)特に劉論文には元稹の詩も紹介されており、本稿も負うところが大きい。